

## 現代英語の語形成からみた Academic Word List の意味論的考察

## — 名詞、動詞、形容詞間の転換 (Conversion) 事象を中心に —

高橋 玄一郎

キーワード：語彙意味論、語形成、転換、Academic World List、名詞・動詞・形容詞

## はじめに

何らかの目的をもって英語を理解し運用するために、いわゆる文法や語彙は不可欠である。本稿は、特に英語学習者が英語を理解し運用するために必要な語形成に関わる転換 (conversion) と呼ばれる事象に注目し、その一端を整理しながら考察する。英語学習に勢いのある時期、たとえば、小学校、中学・高等学校の段階では、語彙を一つひとつ、何故そのように言うのか、などと理屈を考えて、納得してから進むような機会は極めて少ないであろう。ある程度は理屈なしの取り込みを必要とする時期がある。とりわけ大学受験を前にしての学習では、理由は後回しとなることが多いのではなかろうか。学習が少し落ち着いてきた頃に、立ち止まって考えると、そもそも何故なのか、と素朴に浮かぶ疑問も出てくる。英語の学習過程もその例外ではなかろう。

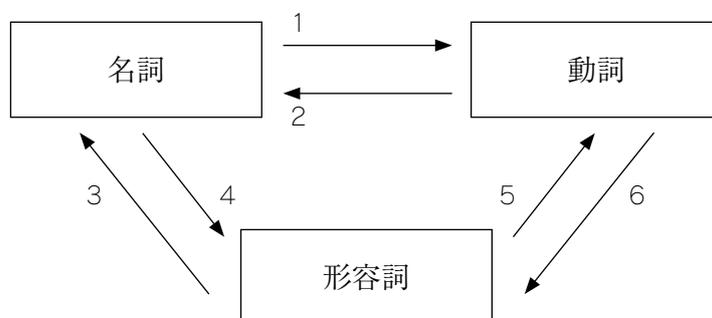
筆者の担当する共通教育英語のクラスで次のような趣旨の質問を受けた。

- ① 通常、名詞として使われている *text* や *message* が、英語の文脈から動詞的にも用いられるようだが、それはどういうことか。
- ② *detective*, *generic*, *variable*, *potential* のように *-ive*, *-ic*, *-able*, *-al* といった形容詞の特徴的な語尾 (接尾辞)<sup>1</sup>のついた単語が、名詞としても用いられるようだが、それはどういうことか。

①の *text* と *message* は、本来、名詞として使われている言葉が、元の語形のままで動詞としても機能する事象である。名詞から動詞の機能への変化といえる。また②では、形容詞から名詞の機能への変化といえる。このような変化の事象を言語学の語形成の観点から転換 (conversion) と呼ぶ<sup>2</sup>。

名詞、動詞、形容詞について、このような現象を考えると論理的には6通りのパターンがある。図示すれば次のようになる。

図1



<sup>1</sup> 接尾辞の他、接頭辞も含め、英語の語形成について文献により概観し、一部、学習者目線でワークシート化したものに高橋 (2017) がある。しかし、そこでは転換事象には触れていない。

<sup>2</sup> 転換事象を homonymy (同音異義語) と捉えることも可能。但し、語の歴史的発達面からの根拠の有無や同音や異義に係る「同異」の程度性を如何に捕らえるのか、などの問題がある。*text* と *message* の場合は問題ないが、*record* や *suspect* のように名詞、動詞間の conversion の際、accent shift (アクセントの移動) が伴うこともあり、その場合は厳密な意味での homonymy とは言えない (cf. partial conversion の議論あり)。また、homonymy を polysemy (多義性) と対照的に議論することも可能で、たとえば、Lyons (1977: 550-569) を参照。

学生からの質問に係る上記①と②は、上図の1と3の矢印に示された転換に関係する。上図の関係を念頭におきながら、名詞、動詞、形容詞間の転換事象を考察してみよう。

本稿では学術分野を問わず広く一般的に用いられる学術関連語彙に焦点を当てるがその際、主として the Academic Word List (Coxhead, 2000; 以下 AWL と略記) と the General Service List (Bauman and Culligan, 1995; 以下 GSL と略記)<sup>3</sup>を利用する。また、適宜、例文等を補足する際に the British National Corpus Online, World Edition (以下 BNC と略記) を利用する。

AWL や GSL にみられる一般学術語彙を3品詞に係る転換事象の観点から概観すると、転換事象が最も顕著に観察されるのは名詞、動詞間であった。特に名詞から動詞への転換に顕著であった(図1の矢印2)。名詞、形容詞間と動詞、形容詞間の転換事象は、名詞、動詞間と較べれば多くはみられなかった。

一般に何らかの研究を行う際に、その研究対象となる事象をできるだけ客観的、正確に観察するための言語表現手段として、名詞と動詞は主役中の主役である。研究対象となる事象を「何が、どうしたのか」という形で言語化する際になくはならぬ品詞といえる。一方、形容詞は、速さや新旧、年齢、その他、物理的な状態や様子を客観的に捉えるための次元形容詞や物理的性質を表すための形容詞等、数多くあるが、人間の性質を現す形容詞をはじめ、易しい、難しいという形容詞も含め、表現者の主観性が概して色濃くにじむ傾向を有する品詞でもある<sup>4</sup>。その意味で形容詞は名詞や動詞とは一線を画す品詞であると考えられる。また動詞、形容詞間における、動詞の分詞形容詞(現在分詞形、過去分詞形によるもの)は-ing や-ed の接尾辞による語形変化を有し、完全な転換とはいえないが、言語表現上は大変、経済性の高い機能である。

以下、図1の順に沿って、名詞、動詞、形容詞間の転換事象を適宜、BNC から用例を補いつつ主として、意味論的な見地から考察していく。

## I. 名詞と動詞間の転換

### 1. 名詞から動詞へ(図1の1について)

通常、名詞として使われている *text* や *message* が、英語の文脈から動詞的に用いられている場合の受け止め方に係る質問は、次のようなパラグラフの英文を考える際に出てきた。

When the telephone all but replaced letter-writing, many thought the art of writing was lost forever, especially among the young. But now, ironically, writing is back, and in a completely new form. Young people these days love to write and send text messages over their mobile phones. It is a big part of their culture. Whole industries are trying to attract young people with new technologies, such as picture messaging, mobile music, and the mobile Internet. But texting is still the most popular way to communicate. Why are young people so attached to it? (Ishitani & Embury, 2007: 14)

[下線部：写真の電送信；携帯電話等による文字情報の作成・電送信や、そのやりとり]

たとえば、*texting* や *messaging* ということばに遭遇するとき、その意味をどのように推察するであろうか。現に辞書によっては、動詞としての *text* や *message* を明記していないものもある。

<sup>3</sup> GSLは便宜上、Huntley & Shidara (2008) 所収のもの (pp. 133-147) を利用する。遡れば、その母体となったリストは Michael West による *A General Service List of English Words*, London: Longman, Green and Co., 1953.

<sup>4</sup> 形容詞一般の意味類型上の特性については、たとえば Dixon (2005<sup>2</sup>) を参照。

文脈を手がかりとすることが基本であるが、それに加えて、*text* や *message* に *-ing* 形が付加していることから、基礎文法を踏まえて機能上、*texting* が動詞の現在分詞か動名詞の形をとり、いずれかの役割を果たしている、すなわち *text* が動詞として用いられていると考えるであろう（この場合、当該文の構造から *texting* は主語の役割を果たしており、動詞 *text* の動名詞形と考える）。辞書を引いて *text* の動詞的意味があれば、それを文脈に当てはめて意味をとり、済ませるのが常であろう。しかしながら、名詞としての *text* と動詞としての *text* が、意味的にいかなる関係で成り立っているのか、立ち止まって考える機会があってもよいと思われる。言葉に宿る規則性を考察し、文脈や場面を考慮しながら、意味を洞察することは、自主的学習の態度としても無益ではなかろう。いわゆる英語の勘といわれるものもこうした洞察力による規則性への気づき (awareness) に支えられているように思われる。

このような英語の語形成に係る転換事象について、意味と形式をバランスよく絡めて類型パターンを提示していると思われる Quirk et al. (1972: 1012-1013) と Quirk et al. (1985: 1560-1561) の枠組みを援用して考察してみよう。

ここでは名詞から動詞への転換について、次の7種を指摘している (Quirk et al. (1985: 1561): (なお便宜上、引用表現の脇に、部分的に意識を添える；以下、同様)<sup>5</sup>

類型① To put in/on Noun (Noun: 名詞；以下、Nとして略記) <当該名詞の対象物に入れる>  
Eg. *bottle*: to put into a bottle (瓶詰めにする)

I left school before my 14th birthday (which could happen in Scotland) and started work the same day in the employ of a grocer and wine merchant. (...) My main task was to bottle wine — Red Biddy it was called, (...) (BNC) [下線部：ワインを瓶詰めにする] 他の類例：*carpet, corner, catalogue, floor, garage, position, shelve, porch*.

類型② To give N, to provide with N <当該名詞の対象物に付与する>

Eg. *coat*: to give a coat (of paint, etc.) to

Cover and simmer the chicken for 15–20 minutes, until tender. Remove the chicken to a serving dish. Increase the heat and reduce the liquid until it will just coat the chicken. (BNC) [下線部：その液体がチキンをちょうど覆うくらいまで]

他の類例：*commission, grease, mask, muzzle, oil, plaster*.

<sup>5</sup> Larsen-Freeman & Celce-Murcia (2016<sup>3</sup>: 42) では、3つの類型によって捉えている：

I) a. He put *butter* on his bread. —> He *buttered* his bread.

b. He poured *water* on the plants. —> He *watered* the plants.

II) a. Jo removed *dust* from the desk. —> Jo *dusted* the desk.

b. I took the *pits* out of the dates. —> I *pitted* the dates.

III) a. He cut the log with a *saw*. —> He *sawed* the log.

b. Sue gathered the leaves with a *rake*. —> Sue *raked* the leaves.

さらに、この類型に係るコメントが続く (ibid.: 引用方法につき、本稿筆者により一部改変)：

Most conversion in English takes place when the underlying verb has a very general meaning, and the meaning of a noun object (direct or prepositional) becomes incorporated into the verb to show that something has been: (1) added, (2) taken away (3) used for something. この (3) の類型に対応すると思われる転換事象を Huddleston & Pullum (2002<sup>3</sup>: 1642) では4種、提示する：○ instrumental noun: *knife, hammer, mop*

○ instrumental verb: *hoist, whistle* ○ body-part nouns: *eye, elbow, finger, head, knee, etc.* ○ person-related nouns in terms of his/her profession, relationship, behavior, or character: (noun->verb) *butcher, doctor, shepherd, usher*; (verb->noun) *bore, cheat, flirt, spy*. 因みに先に、Larsen-Freeman & Celce-Murcia (2016<sup>3</sup>: 42) が、(1) added として示した意味の括りに対応する部分を見ると、Huddleston & Pullum (2002<sup>3</sup>: 1642) では“apply ~ to”と他動的に表現し、類例語として、*enamel, grease, sugar, water*等を例示する。同様に、先の (2) taken away に対応する意味の括りに対しては“remove ~ from”と表現し、類例語として *hull, shell, skin, weed*を示す。

- 類型③ To deprive of N <当該名詞の対象物を取り除く>  
 Eg. *core*: remove the core from  
 Chicken curry ( Main course : serves 2 ) 2 chicken joints with all fat and skin removed, 16 oz tin tomatoes, bay leaf, 1 eating apple, cored and chopped small. (...) (BNC) [下線部：芯を除いて細かくきざんだ食用リンゴ一個]  
 他の類例：*gut, peel, skin, top-and-tail*
- 類型④ To...with N (more precisely, the meaning of the verb is 'to use the referent of the noun as an instrument for whatever activity is particularly associated with it') <当該名詞を道具として何かを行う>  
 Eg. *brake*: to stop by means of a brake  
 Slow down at corners, don't overtake, Get your foot off the pedal — I'm trying to brake!  
 (BNC) [下線部：私がブレーキをかけるから！]  
 他の類例：*elbow, fiddle, hand, finger, glue, knife*
- 類型⑤ To be (or act) as N with respect to ... <特定の観点から当該名詞の対象物の役割を担って存在（または行動）する>  
 Eg. *chaperon*: to act as chaperon to  
 She had no real objection to the change of roles or to chaperoning her own servant — to her it would be another adventure. (BNC) [下線部：自分の使用人の介添役をすること]  
 他の類例：*father, nurse, parrot, pilot, referee.*
- 類型⑥ To make (or change) ... into N <当該名詞の対象物へ作り変える（または変化させる）>  
 Eg. *cash*: to change into cash  
 So if you are in a hurry to cash your cheque you can always ask... (BNC) [下線部：小切手を現金にする]  
 他の類例：*cripple, group*
- 類型⑦ To send (or go) by N <当該名詞の対象物を手段として送る（または移動する）>  
 その1 Eg. *mail*: to send by mail  
 He only knew it must contain documents of great corporate sensitivity since it could not be mailed or faxed , or sent by commercial courier pouch. (BNC) [下線部：郵送できないので]  
 他の類例：*ship, telegraph*
- その2 Eg. *bicycle*: to go by bicycle  
 And they had always treated Liz — the same age as Laura — just as though she were their own child. Laura grinned as she recalled her early teens when she and Liz, together with their school-friend Julie, had spent the holidays climbing trees, swimming, and bicycling around the beautiful Devonshire countryside. (BNC) [下線部：木登り、水泳、サイクリングをしたりして休暇を過ごした]  
 他の類例：*boat, canoe, motor*

冒頭に挙げた、名詞から動詞に転換される *text* と *message* は、上記類例では、情報の伝達という点で、類型⑦の、その1に近いと考えられる。ただし、典型例と考えられる *mail* や *e-mail* のように、*mail* や *e-mail* を手段として *mail* や *e-mail* を送る、というのではない。たとえば、次例を見てみよう。I'll text you as soon as I get the news. (Longman Dictionary of Contemporary English Online より；以下、LDOCE-Online と略す) や She's always text messaging her friends. (LDOCE-Online より；*text messaging* は、複合動詞 *text message* の現在分詞と考える。) このような、動詞に転換した用例では、動詞の *text* は、*text message* (文字情報によるメッセージ) を (誰かに) 電送信する [(他動詞)、自動詞] という意味を有し、*text message* は、名詞の *text* と動詞の *message* から成る複合動詞と捉え、意味は動詞の *text* と同等と考えられる [cf. 動詞の *message* は、*text message* を (誰かに) 電送信する、という (他動詞)、自動詞と考える]。 *text* も *message* も動詞として用いられる際には、その伝達手段が携帯電話などの電子機器によることが前提とされていると考えられる。よって類型⑦に示された i) send by N に対応する形で、send by text とか send by message とは考えなくてよいであろう。名詞の *text* や *message* は、本来的に、作成された当該情報が解読される他者へ届けられるという宿命を負っていることから、動詞への転換は不自然ではないと考えられる。また、本節冒頭の引用英文中の用例にあった *picture messaging* は、*text messaging* から類推可能であり、動詞 *message* を基本とし、*text* (文字情報) ではなく *picture* (写真) を電送信すること、と考えられる。

ここで、名詞から動詞への転換事象をもつ語彙について、一般学術英語に焦点を置いた AWL 全体では、どのような傾向を見せるのかを見ておこう。

先の、名詞から動詞への転換に係る意味類型を基準に AWL の語彙を概観してみると、類型② (すなわち to give N, to provide with N ; eg. *benefit, impact, supplement, etc.*)、類型⑥ (すなわち to make/change...into N ; eg. *contract, function, process, etc.*)、類型④ (すなわち to...with N ; eg. *filter, monitor, trace, etc.*) が全体の9割を占め、名詞から動詞への転換事象の中心を成し、その他の類型① (すなわち to put in/on N)、類型③ (すなわち to deprive of N)、類型⑤ (すなわち to be/act as N)、そして類型⑦ (すなわち i) to send by N/ ii) to go by N) には、類例が皆無ではないが、ほとんど見当たらない。

つまり、「当該名詞の意味を対象へ付与する」(類型②)、「当該名詞の意味に変化するよう対象に働きかける」(類型⑥) ならびに「当該名詞の意味を道具・手段として対象に働きかける」(類型④) といった意味の機序が、AWL の名詞から動詞への転換事象に典型的にみられる。

なお、これら、名詞から動詞へ転換された場合は、例外を除いて大部分が他動詞であるとしている (ibid.)。では自動詞ではどうであろうか。AWL では大部分が、他動詞と自動詞の両方で用いられ、自動詞のみは稀有である。しかしたとえば、*conflict* は、それに該当し、次例のように、自動詞のみで用いられる。

There is no single moral principle which is sole and supreme and can never conflict with any other. They can all conflict. (BNC) [下線部：他のいかなる原理とも矛盾し得ない；すべてが矛盾する]

## 2. 動詞から名詞へ (図1の2について)

今度は転換の順序を反対に、動詞から名詞への転換が見られる語彙をみてみよう<sup>6</sup>。その転換に係る意味構造については、次の7種が指摘されている (Quirk et al. 1985: 1560)

類型① ‘State’ [generally ‘state of mind’ or ‘state of sensation’] (from verbs used statively to count or non-count nouns) <動詞に係る状態>

Eg. *desire, dismay, doubt, love, smell, taste, want*

The elements of success Connors owned were his pride, his desire to train, working hard on good tennis habits. (BNC) [下線部：鍛錬しようとする願望]

類型② ‘Event/activity’ (from verbs used dynamically) <動詞に係る出来事／活動>

Eg. *attempt, fall, hit, laugh, release, search, swim, shut-down, walk-out, blow-out* (of a tyre)

There were deliberate attempts to develop elements of both high and popular culture in music, poetry, dance, and games. (BNC) [下線部：(...) を高めようとする意図的な試み]

類型③ ‘Object of V’ <動詞に係る目的語；動詞が有する他動性の対象>

Eg. *answer* [‘that which answers’], *bet, catch, find, hand-out*

There is no correct answer — you must simply do what you feel is right for you and your pet. (BNC) [下線部：正しい答え]

類型④ ‘Subject of V’ <動詞に係る主語（主体）>

Eg. *bore* [‘someone who or that which bores/is boring’], *cheat, coach, show-off, stand-in*

Oh Alison, don't be such a bore! You have a completely wrong picture of me. (BNC) [下線部：うんざりさせるな]

類型⑤ ‘Instrument of V’ <動詞に係る道具>

Eg. *cover* [‘something with which to cover things’], *paper, wrap, wrench*

The inclusion of John Cleare's name on the book cover usually guarantees quality photographs, and the colour and atmospheric black and white images were no disappointment. (BNC) [下線部：本のカバー]

類型⑥ ‘Manner of V-ing’ <動詞の ing 形（=動名詞的意味）に係る様態>

Eg. *walk* [‘manner of walking’], *throw, lie* (eg. in *the lie of the land*)

How stressed are you? Put a tick in the column that applies to you. (...) 4. I'm always urging people to hurry up. 5. I do everything quickly : walk, talk, eat. ... (BNC) [下線部：歩き方]

類型⑦ ‘Place of V’ <動詞に係る場所>

Eg. *divide, retreat, rise, turn, lay-by, drive-in*

At one time the line of the defenses used to be regarded as a significant rural-urban divide, but the repeated recognition of extensive extra-mural suburbs has necessarily shifted the emphasis of enquiry. It is now clear that the construction of the small-town

<sup>6</sup> 転換の順序を厳密に規定する方法は、語彙の歴史的発達を文献学的に裏付けることで可能と思われるが（例えば Oxford English Dictionary を援用）、ここでは当該の先行研究の知見に依存する。これに関連して Huddleston and Pullum (2002<sup>3</sup>:1641) には次のような記載がある：In a considerable number of cases it is unclear which is the earlier than the other. The noun *bottle* is more basic than the verb since something is put when it is bottled. Conversely *arrest* is primarily a verb, with the noun denoting the event wherein someone is arrested.

defenses provided an additional influence on their morphological development, depending upon the inclusion or exclusion of particular areas. (BNC) [下線部：都市と田舎の区分に係る重要な境界]

これら7つの意味類型からAWLの語彙を概観すると、動詞から名詞への転換は、その反対の転換とくらべて、全体として多くは見当たらず、前者は後者の三分の一程度であった。

しかしそれでも、動詞から名詞への転換機序の類型内で差が見られた。類型②、すなわち当該動詞が関わる出来事や活動へ名詞化するもの (eg. *estimate, survey, transfer, etc.*)、を中心にして (全体の6割)、類型③、すなわち当該動詞が有する他動性の対象物へ名詞化するもの (eg. *construct, display, release, etc.*; 例示の語は類型②にも該当し得る)、が少数あり (全体の2割強)、その他の類型にはほとんど類例が見当たらない。7つの類型内からみれば、出来事、活動、他動性といった、動詞がもつ典型的な性質が関わる意味を介して、動詞から名詞への転換事象が顕著にみられる。

なお、動詞、名詞間の転換の際、発音とスペルの面で注意を要する語彙がある<sup>7</sup>。

今まで見てきた、動詞、名詞間の転換事象は、形容詞との間でも各々、転換事象を観察することができる。形容詞と名詞、形容詞と動詞の関係についてそれぞれ、考察してみよう。次節では形容詞と名詞間についてみる。

## II. 形容詞と名詞間の転換

### 1. 形容詞から名詞へ (図1の3について)

冒頭に触れたが、形容詞語尾のことばが、名詞として用いられることへの違和感に係る質問に立ち帰り、考察をはじめ。たとえば、*detective* が探偵、刑事、*generic* が後発薬や複数のブドウを原料とした廉価なワイン等を表すような事象である。前者は、*detect* という動詞から派生された形であるため、名詞形への語形成によって生じる *detection* という名詞も存在するが、ここでは、形容詞形の語彙が名詞的意味を有する事象について考察する。

まず、これらの形容詞は、その形容対象となる名詞が明白である場合、つまり形容詞によって形容される名詞が文脈・場面上明確であると判断される場合に、当該の被修飾語の名詞が省略されることができるとみることができる。先の例で見れば、例えば *detective person, generic drugs (or medicine), generic wine* といった具合に、当該形容詞が限定的に形容する名詞句が想定されうる。こうした意味合いが実際の各文脈や場面のなかで、言語表現するものと理解するものの双方の間で了解されているとみられる。

この事象に係るその他の類型も含め、Huddleston and Pullum (2002: 1642)により概観しておこう：

- 類型① A type of person 〈人物〉: eg. *comic* (person), *regular* (soldier/customer), *royal* (member of royal family)
- 類型② Color terms 〈色彩語〉: eg. His tie is a dark shade of *brown*. Cf. His tie is *brown*. [adjective]
- 類型③ Periodicals 〈定期刊行物〉: eg. time-period adjectives such as *daily*, *weekly*, *monthly*, *quarterly* cf. *daily*: cleaner who comes daily

<sup>7</sup> 強勢が移動する場合、通例、強勢は動詞で用いる際、後部にあるが、名詞では前部に移る (eg. *affect, conduct, construct, impact, export, compound, contact, contract, implement, project, suspect, etc.*)。いわゆる名前動後の変化事象である。但し、*estimate* (第一音節に強勢) や *consent* (第二音節に強勢) のように、動詞と名詞で共通の強勢位置をもつ場合もあり、学習者にとって悩ましい点でもある。その他、発音、スペル面で注意を要する点について、例えば、Quirk et al. 1985: 1566-67を参照。

類型④ Specialized meanings (意味の特定化) : eg. white (white part of egg, white part of eye, or person with white skin)

類型⑤ Plural inflection types (複数を示す形態素 -s が付加した場合) : eg. basics, greens (green vegetables), marrieds, smalls (underwear), woolies

類型①は類例として、AWL から *individual, principal, professional* などが追加できるが、“a type of person” という類型枠に広い意味の “thing” も併記し、“a type of person / thing” という枠組みで考えれば、*alternative* や *initial, final, minor, specific, variable, preliminary, potential, generic* なども、追加できると思われる。そのうち二例を挙げておこう：

More and more people are taking to their bikes as an alternative to driving or using public transport. (BNC) [下線部：車や公共交通機関の代替手段として]

From hundreds of auditions, held throughout the world, the board chose 38 competitors. Each of these played two recitals in the preliminaries. (BNC) [下線部：予選で]

類型②の色彩語や類型③の定期刊行物は、言語表現上、有限数の比較的閉じた語彙として捉えやすいであろうが、特別な意味を帯びる名詞化を示す類型④は、人文、社会、自然科学に係る各専門分野やその学際領域の面から、一つの語彙が分野・領域に応じて、さまざま意味を持ちうる。たとえば、この節の冒頭でも同趣旨の件に触れたが、先に挙げた *derivative* であれば、言語学では派生語、数学では導関数、微分係数、化学では誘導体、精神分析学で派生物、経済学や社会生活上では金融派生商品といった具合に、各文脈・場面のなかで、名詞に転換した当該形容詞がどういう意味を持ちうるかについて、推察して考えることが求められる。

## 2. 名詞から形容詞へ (図1の4について)

今度は反対に、名詞から形容詞への転換を考える。

形容詞の性質として一般的に考えられている特徴を概観するため、例えば形容詞 *hungry* の振る舞いを見ておこう。

① He was like a hungry dog. [下線部：飢えた犬]

② The dogs seem very hungry. [下線部：とても空腹だと思われる]

③ He slept the first night in a field, feeling lonely, tired, cold and hungry. He was even hungrier the next morning when he woke up, and he had to buy some more bread with his penny. (BNC) [下線部：(昨晚よりも) ずっと空腹であった]

形容詞を名詞の前に置いてその名詞を形容する、いわゆる限定用法 (上例①) と、名詞の後に、例えば *be* 動詞や *seem* 等と共に起する叙述用法がある (上例②、③)。また *very* 等の程度副詞とともに共起し (ie. 意味の段階性を受け容れられる素地を持ち)、比較表現も可能であることが挙げられる (上例②、③)。こうした基準でみると、いわゆる形容詞と呼ばれるすべてが、これらの条件を満たすわけではない。名詞や副詞等、他の品詞との境界があいまいで、品詞間には連続性があると見られる。典型的な形容詞と、そうでない形容詞があるという理解が実態に適っていると思われる<sup>8</sup>。

<sup>8</sup> 意味の段階性や品詞の概念も絡めた形容詞の性質に関する議論は、例えば Bolinger (1972) や Quirk et al. (1972: 231f.) を参照。

素朴に観察していると、名詞が形容詞の限定用法的に用いられる場面は枚挙にいとまがない<sup>9</sup>。例えば、*information* と *digital* に注目して次例をみてみよう。

In general, concerned individuals and organizations argue that we are moving into a new information age. It is a period, they say, in which governments will be able to compile far more information about citizens than the citizens want them to know. (...) In the new digital age, the critics assure us, reinforcing privacy must be a priority. Huntley & Shidara. (2008: 118) [下線部：情報化時代；デジタル時代]

この場合、最初の下線部にある *information* は形容詞 *informational* と同等であり、一方、もう一つの下線部は *digit age* とはなっていないが、BNCによれば、*digit information*, *digit growth*, *digit presentation* といった連語は可能であり、*digit* の形容詞転換もさほど無理なく推察できる。

名詞が典型的な形容詞として振る舞う事象は、通例、名詞 *fun* の用例（どちらか言えば米語的な非公式用法）を用いてよく紹介される場所であるが、ここでは名詞 *adult* の振る舞いを見てみよう。

Our relations are more adult and friendly than those of many academic staff rooms that I have seen. (BNC) [下線部：(...) よりもヨリおとなで (...); 比較表現の比較級となり、叙述用法として機能]

But many parents will welcome the arrival of the time when it is possible to share interests and to talk together in a more adult way. (BNC) [下線部：ヨリおとなの振る舞いで; 比較表現の比較級となり、後続の *way* を形容する限定用法として機能]

In fact my girlfriend Claudia and I have talked about marriage and I don't see why we shouldn't wed sometime although we have not set a date. When my parents split up, it was all very adult and open. (BNC) [下線部：とても大人らしく冷静で (...); 程度副詞 *very* と共起し叙述用法的に *open* と並置]

Day-old babies suddenly take on almost adult qualities. They have, suggest relatives, their father's temper, mother's nature and grandmother's charm. (BNC) [下線部：おとな顔負けの資質; 近似を示す副詞 *almost* と共起し限定用法として機能]

Jinnah and Nehru were fully adult before 1914: Jinnah was already an experienced politician (...) (BNC) [下線部：すっかり一人前; 極点を示す程度副詞 *fully* 共起し叙述用法として機能]

このように、*adult* は比較表現、段階の異なる程度副詞との共起、限定・叙述用法が可能なことから形容詞に転換した度合いが極めて高い。なお、先の「形容詞性」の幅を前提に、このタイプの類例を AWL から探せば、*adult* ほどの高い形容詞性は持たぬとも、*impact*, *job*, *stress*, *volume* 等が挙げられる（用例省略）。

<sup>9</sup> 名詞によるヨリ詳細な限定用法の考察については、たとえば Huddleston and Pullum (2002: 553-559) を参照。

## III. 形容詞と動詞間の転換

## 1. 形容詞から動詞へ（図1の5について）

形容詞、動詞間について、まず形容詞から動詞への転換をみてみよう。

転換時の意味類型の観点から次の3つのパターンが認識されている（cf. Huddleston & Pullum 2002: 1643-44）：

類型①（動詞に転換する前の）当該形容詞の状態の意味へ、対象物を他動詞化する。

類型②（動詞に転換する前の）当該形容詞の状態の意味をもとに自動詞化する。

類型③（動詞に転換する前の）当該形容詞の意味を様態(manner)の面から活かし対象物を動詞化する

類型①について、次例をみてみよう。下線部の *dry* は、文全体の構造から to 不定詞の動詞として機能しているが、形容詞としての「乾燥している」という状態の意味が、下線部では *their clothes* を目的語としてとり、服を乾燥した状態にする、すなわち、服を乾かすという意味へ他動詞化されているとみられる。

They came to an uninhabited hut where they made a fire to dry their clothes, for all of them were wet through to the skin, and an old sail was spread upon the bare ground, which served as a bed for the Prince, who was very well pleased with it and slept soundly.  
(BNC) [下線部：火をおこして、服を乾かした]

この *dry* は文脈が変われば、「服が乾く」(clothes dry) という具合に自動詞化の可能性もある。当該形容詞の意味へ対象物を他動詞化できる形容詞は、自動詞化も可能であることが多い (eg. *clear, cool, empty* [ibid.: 1643])。

類型②に関する次例では、下線部で形容詞として「狭い」という意味をもつ *narrow* が動詞として用いられ、狭い状態になるという自動詞の意味を帯び、副詞 *further* と共起している。目的語は必要ない。

Many degree courses, on the other hand, clearly belong to the specific stage in a person's educational development, after which his or her interests and horizon may narrow further, in specialized research or employment, or broaden out again.  
(BNC) [下線部：関心や視野がさらに絞られる]

この *narrow* も、先の *dry* と同様に、文脈が変われば、「関心をせばめる」(narrow one's interests) という具合に他動詞化することもある。

類型③については、次例の *brave* と *frequent* を見てみよう。形容詞としての意味が様態面で用いられ、他動詞化している。

When we had ascended a little more than half-way, I was much afraid we should have been doomed to return, on account of the masses of rock, over which we had to climb, beginning to increase in size ; we knew, however, that a descent would have been attended

with infinite danger, and being urged on partly by eagerness in our pursuit, but more from a desire to be at the top, we determined to brave every difficulty. (BNC) [下線部：あらゆる困難に勇敢に立ち向かう]

Being in the same business, it's inevitable that we bump into each other all over the world. Crews and sponsors tend to frequent the same restaurants, pubs and hotels. (BNC) [下線部：同じレストラン、パブ、ホテルに足繁く通う]

なお、AWL ならびに GSL から類例を探すと、次のような語が挙げられよう：  
*appropriate, approximate, enable, parallel, tense; absent, bare, better, blind, busy, clean, clear, correct, hollow, humble, moderate, perfect, quiet, ready, rough, round, shallow, single, slight, slow, sour, steady, tame, tender, total, yellow, true, wrong* (用例は省略)。

なお発音で注意が必要なのは、冒頭の 2 語 *appropriate* と *approximate* のように、形容詞の語尾の強勢は弱体化された音 ( / ət / ) であるが、動詞の場合は第二強勢となる ( / èt / )。以下、この両語に係る動詞の用例を BNC から示す。

The various critics accused Britain of neglecting its brains, wasting the results of its elementary schools, and of failing to offer facilities for proper training (technical, vocational and liberal ) to appropriate students. (BNC) [下線部：学生に施す (技能、職業、教養に係る) 適切な訓練用施設]

It is being argued that children's explanations will be at their best in situations which conform to the normal rules of discourse. In a school setting, it may be possible to approximate to such situations by encouraging peer learning groups and discussions in which the teacher assumes a facilitatory role rather than a didactic role. (BNC) [下線部：そのような状況設定に近づけることは可能 (...)]

## 2. 動詞から形容詞へ (図 1 の 6 について)

派生接辞によらない典型的な転換とはいえないが、動詞のいわゆる現在分詞形、過去分詞形が形容詞の機能を持つことが観察されることから、動詞の -ing 形や -ed 形にみられる接尾辞による語形変化を通じて、機能的な面からの転換は行われうると考えられる。

その際、動詞の分詞と分詞形容詞の違いが議論されることがある。例えば、動詞 *calculate* についてみると (cf. Quirk et al. 1985: 414) :

She is very calculating (but, her husband is frank). [下線部：とても打算的だ (しかし、その夫は素直だ)]

She is calculating (our salaries). [ '...so don't disturb her while she is doing the arithmetic.' ] [下線部：(私たちの給与の) 計算をしている]

形容詞の判定基準として用いられる動詞 *seem* によるチェックをかけてみる。*seem* の補部に生じうるかどうかにより形容詞か否かの判定ができるとされている。

She seems very calculating.

\*She seems calculating our salaries.<sup>10</sup>

話者や書き手が何らかの根拠に基づいて思いを巡らす状況を表す *seem* という動詞の補部は、どのように想定されるのかという部分の意味を、その受け皿として備えている構造と考えられる。想定であれば、その想定内容に係る「意味」は段階性や程度性を許容する「幅」のあるものであろう。打算的 (calculating) かどうかは、状況等から判断して、その程度も含め、斟酌する対象となる。それは *very* 等の程度副詞との共起関係にも現れている。他方、給料の勘定を間違いないように行っているという状況は、通常、想定する余地のない、客観的な行為の描写と考えられるので *seem* の補部にはなじまないのであろう。動詞 *seem* を用いてあれこれ思いめぐらす余地がないともいえる。

ここまで *calculate* の現在分詞をみた。過去分詞の *calculated* についても考察してみよう。

The palette knife is Williams's preferred instrument. I don't know why I started using a palette knife ; maybe because I wanted to mould the paint to show the other side of the mountain.

I work in a very intuitive way rather than in a calculated manner. (BNC) [下線部：あれこれ考えた計画的な方法というよりは、直感的なやり方で (...)]

Change in the total ozone (Dobson Units) due to heterogeneous processes for the period 15 December to 25 March from the simulation in which the radiative heating and cooling were calculated using present-day levels of CO<sub>2</sub> and climatological ozone concentrations. (BNC) [下線部：寒暖に係る放熱量が算出された]

前者の用例は、想定や推量の対象となりうる意味を有し、後者は、計測するという客観的行為を表すため想定や推量の対象にはならないであろう。

このように、-ing や -ed の接辞添加による典型的な転換事象とはいえないものの、基本的に動詞の形容詞的機能を有する現在分詞と過去分詞が形容詞の役目に、機能上、転換しうると考えられよう。要はやはり当該の文脈上の意味の取り方に係っている。語形のみで判断することはむづかしい。

#### IV. 名詞、動詞、形容詞間の転換 (cf. 図1)

これまで、名詞と動詞、形容詞と名詞、形容詞と動詞、という具合に二つの品詞間で転換事象を考察してきたが、ここでこれら3つの品詞間での転換をみってみる。

辞書により、品詞の記載に揺れが認められる。特に、形容詞としての認可に差がある。たとえば、*team* という語彙について、*Oxford English Dictionary* 2<sup>nd</sup> ed. (Oxford Univ. Press, 1989) では、名詞と動詞としてのエントリーは設けているが、形容詞としてのエントリーはなく、名詞の語義の中に“attrib. and comb.”という標識を立てて、形容詞の限定的用法や定型表現的に語句として用いる用法を挙げている (eg. team leader, team player)。attrib. は attributive (限定的用法と解釈できる) であり、comb. は combinations の略記である。一方、*Random House Unabridged Dictionary* 2<sup>nd</sup> ed. (1987)、『新英和大辞典 (第6版)』(研究社, 2002) や『ジーニア

<sup>10</sup> 文頭の asterisk は、非文 (ungrammatical sentence) であることを示す。

ス英和大辞典』(大修館, 2001)では、名詞、動詞、形容詞という3つの品詞名を挙げ、形容詞には(限定用法)に限る旨、記してある。

*team* の用例をみてみよう。

The qualities which are required to maintain and enhance a team include : specific, understood and accepted objectives, open and authentic communications, a high level of mutual trust and reciprocated concern, recognition of conflicts and direct resolution of them, detailed understanding of the knowledge, skills and qualities of the team, consensus decision making, distributed leadership, respect for individuality, team relationships which are dynamic, growing and derived from personal and team learning. (BNC) [下線部: チームを維持し、向上させる; チームとしての個人個人の関係; チームとしての学び]

ここでは、前者の下線部で *team* が名詞 *relationships* を、後者では、名詞 *learning* をそれぞれ限定的に形容している。他方、次例では、*team* が動詞として機能している。

The idea is simple : a group of people with different building skills team up to build each other's houses, saving perhaps a third of the cost of a ready-made home. (BNC) [下線部: 協力してお互いの家を建てて]

形容詞性について先に触れたが、*brief* という形容詞は、“This brief summarises the arguments in favour of the European Commission's proposed ban on all tobacco promotion and advertising (...).” (BNC; 下線部: この要約) に見られるような名詞の用例、“Brief me on the latest situation, please” (BNC; 下線部: 私に概要を伝えよ) に見られるような動詞の用例のほか、形容詞については、*brief comment* (短いコメント) の限定用法とともに、次のような叙述用法も可能である。

We are making enquiries into the sudden death of Mrs Margot Iverson. Henry Tylor bowed his head. Anything that I can tell you, Inspector, I will, but my acquaintanceship with Mrs Iverson in the event was brief. (BNC) [下線部: 私と Iverson 夫人との交際は、短かった]

I cannot devote a whole book to the subject, so my descriptions of the numerous cheeses available will be rather brief. (BNC) [下線部: 入手可能な多くのチーズに関する記述はかなり短いものになるだろう]

このように形容詞性(裏を返せば、名詞性)の幅に程度差があるものの、便宜上、少なくとも限定用法を有するものを形容詞と見なし得れば、3品詞の機能を併せ持つとみてよいであろう語彙は、AWL から拾えば、他に次のようなものが候補として挙がる: *substitute, process, compound, contact, draft, offset, parallel* (用例は省略)。

## おわりに

英語クラスでの学生からの質問を契機として、現代英語の名詞、動詞、形容詞の語彙を主に AWL を対象に転換事象の観点から考察してきた。強勢や母音の変化、動詞の分詞形に係る事象、形容詞性の程度差等、デリケートな面があるものの、3品詞の転換に係る相互の機能上の変化を意味の観点からみてきたことになる。

語形変化を伴わない変換事象は、語彙構造の面からみれば、言語表現の経済性に資するものといえる。しかしその分、この言語を利用する側からすれば、語彙の形から区別できない分を名詞、形容詞、動詞それぞれの機能を考えながら、英語の文構造や語順を頼りに読み取っていかねばならない。文構造や語順は、語彙の力とともに、具体的な場面、文脈の中で意味を紡いでゆく。ことばのやりとりの感度と質を高めていくためにも、日常生活や、専門分野での学びの中で、言葉の形と働きへの気づきを、折に触れて、広げ深めていくことが求められるであろう。今回、転換事象の観察対象とならなかった副詞、その他の品詞や複合語については、機会を改めて考えたい。

## 参考文献

- Bolinger, D. (1972) *Degree Words*. The Hague: Mouton.
- Coxhead, A. (2000). 'A new Academic Word List'. *TESOL Quarterly*, Vol. 34, No. 2(summer, 2000), pp. 213-238. Retrieved from <http://www.victoria.ac.nz/lals/resources/academicwordlist/>
- Dixon, R. M. W. (2005<sup>2</sup>) *A Semantic Approach to English Grammar*. Oxford: Oxford University Press.
- Huddleston, R. D. and Pullum, G. K. (2002) *The Cambridge Grammar of the English Language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Huntley, H. and K. Shidara. (2008) *Introduction to Academic Reading: Acquiring the Essential Academic Vocabulary*. Cengage-Learning.
- Ishitani, Y & S. Embury (2007) *Outlook on Science and Technology: Skills for Better Reading III*. Tokyo: Nan' un-do.
- Larsen-Freeman, D. and M. Celce-Murcia. (2016<sup>3</sup>) *The Grammar Book: Form, Meaning, and Use for English Language Teachers*. National Geographic Learning & Heinle Cengage Learning.
- Lyons, John (1977) *Semantics vol.2*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Quirk, R., Greenbaum, S., Leech, G. and Svartvik, J. (1972) *A Grammar of Contemporary English*. London: Longman.
- , (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.
- Takahashi, G. (2017) "English Word Formation and its Active Use in Academic Reading," A handout delivered at reading session in English Workshop for Teachers held at Kagoshima University on Aug. 9, 2017.

## コーパス

The British National Corpus Online, World Edition. 小学館ネットコーパス.

---

**Abstract**

A Semantic Approach to the Academic Word List in English:  
With Particular Reference to the Conversion between Nouns, Verbs, and Adjectives

Gen' ichiro Takahashi

This article deals with a type of English word formation called conversion or “zero-affixation” as in the creation of the verb text from the noun text or of the noun derivative(s) from the adjective *derivative*. This means the change of “parts of speech,” which leads to the shift of function in sentences. These phenomena can be widely observed in English as well as in other languages, which is an occurrence closely related with the economy of language expression. The purpose of this paper is to examine the conversion phenomena observed between English nouns, verbs and adjectives in terms of lexical semantics and to obtain some hints about general academic education. In this research we mainly use the Academic Word List (Coxhead, 2000) and the British National Corpus. In the conversion of the three parts of speech, the most prototypical conversion turns out to be found in that between nouns and verbs. The conversion between nouns and adjectives and that between verbs and adjectives might seem less salient than that between nouns and verbs. In order to effectively use the English vocabulary for general academic purposes, we need to develop a deeper insight into the conversion phenomena as well as other word formation processes such as prefixation, suffixation, and compounding.

**Keywords** : lexical semantics ; word formation ; conversion ; Academic Word List ; nouns, verbs, and adjectives